

プログラム名	子どものフィジカルアセスメント・救命処置	講師	看護師（小児救急看護認定看護師等）
時間（分）	90分		
目的	子どものバイタルサインを測定し危機的状況がないことを評価する。 子どもの急変時対処について理解する。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・年齢ごとのバイタルサインの正常値を説明することができる。 ・子どもの呼吸の特徴とおこりやすい問題について説明することができる。 ・呼吸・循環の逸脱状態について説明することができる。 ・けいれんの観察ポイントを説明することができる。 ・PBLS に沿って初期救急対応の手順が説明できる。 ・CPA を想定してモデル人形を用いて初期救命処置ができる。 ・体格に応じて蘇生器具を選定し正しく使用することができる。 		
コンテンツ	<ul style="list-style-type: none"> ・初期評価 ・呼吸窮迫・呼吸不全 ・循環不全 ・けいれん ・PBLS の流れ ・PBLS の実際 ・AED の操作について 	【講義】 【演習（実習）】	
テキストページ	127 ページ～		
必要物品等	蘇生モデル（小児5 乳児5） バルブバッグマスク 各サイズ5 AED プロジェクター・PC・ポインター・マイク		

プログラム名	寝る・食べる・体温維持・呼吸の問題と対応	講師	看護師
時間（分）	120分・120分		
目的	子どもの基本的セルフケア要件をふまえて、健康増進のための生活・環境調整ができる。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・健康な睡眠生活のための生活スケジュールを提案することができる。 ・子どもの適切な体温調整のためのケアについて説明することができる。 ・子どもの食機能の発達と食形態の変化について説明することができる。 ・子どもの食機能や食形態に応じた栄養経路について説明することができる。 ・子どもの食機能獲得に向けての口腔ケア・摂食嚥下訓練の要点を説明できる。 		
コンテンツ	<ul style="list-style-type: none"> ・睡眠・覚醒リズムの調整 ・体温調節 ・入浴の生理学的意義 ・子どもの食機能の発達 ・経口摂取が困難な子どもの栄養 ・ペースト食を作ろう 	【講義】	【演習（実習）】
テキストページ	143 ページ～		
必要物品等	PEG・注入器 PC・プロジェクター・ポインター		

プログラム名	退院支援（退院調整会議）	講師	病院 MSW もしくは訪問看護師
時間（分）	45 分		
目的	病院 MSW、訪問看護師それぞれの立場からの退院支援の実際のプロセスを学び、病院と地域のよりよい連携について考える。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 退院支援のプロセスがわかる ・ 退院支援における病院 MSW、訪問看護師それぞれの役割がわかる ・ 退院調整会議（退院時共同指導）において話し合うべき内容がわかる 		
コンテンツ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 訪問看護の立場からの退院支援 ・ 病院 MSW の立場からの退院支援 ・ ・ 	【講義】	
テキスト ページ	274 ページ～		
必要物品等	なし		

プログラム名	子どものリハビリの実際	講師	理学療法士
時間（分）	60分		
目的	重症心身障がい児といわれる子どもと家族の生活を支えるためには、日常のケアにあたり、身体の仕組みを理解して対応できることが望ましい。訪問看護の際に、呼吸や姿勢について、リハビリ的な考え方を取り入れることで、子どもに安楽な状況を提供できるようになることである。		
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 姿勢の基本的知識を理解し、支援を实践できる。 2. 呼吸の基本的知識を理解し、支援を实践できる。 3. 姿勢と呼吸の関連性を理解し、支援を实践できる。 4. 訪問看護の際に、道具の工夫が行える。 		
コンテンツ	<ul style="list-style-type: none"> ・姿勢と呼吸の基本的知識と関連性についての解説 ・実技 	【講義】	【演習（実習）】
テキストページ	238 ページ～		
必要物品等	ブルーシートもしくはマット、椅子、バスタオル、実技資料 (パソコン、プロジェクター、スクリーン、ポインター、マイク、スピーカー)		

プログラム名	感覚統合を訪問看護に活かす	講師	作業療法士
時間（分）	120分		
目的	感覚統合の基礎について学び、訪問看護に活かすための感覚の見方、考え方を身につけることを目的とする。感覚統合で特に大切な3感覚（前庭覚、触覚、固有受容覚）の理解は、対象者はもとより、看護者自身の感覚の特徴への自覚を促す。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・感覚統合の基礎的な知識を理解することができる。 ・3つの感覚について、概要を説明することができる。 ・自分自身の感覚の特徴について述べるすることができる。 		
コンテンツ	<ul style="list-style-type: none"> ・感覚統合の基礎知識の学習 ・さまざまな感覚の体験（触覚、固有受容覚、前庭覚、視覚など） 	【講義】 【演習（実習）】	
テキストページ	246ページ～		
必要物品等	PC、プロジェクター、体のある程度動かせるスペース		

プログラム名	療育施設を知る	講師	療育施設職員
時間 (分)	60 分		
目的	<p>重症心身障がい児の歴史は壮絶なものであった。その中から現在の形が出来上がっていった。重症心身障がい児および通園の設立までの歴史を知ることにより、未来について考える。</p> <p>また、児童発達支援、放課後等デイサービスおよび重症心身障がい児ショートステイの制度を知り、地域での生活を広げていく。</p>		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 重症心身障がい児・通所の歴史を知る。 ・ 児童発達支援・放課後等デイサービスを知る。 ・ ショートステイの制度と問題点を知る。 		
コンテンツ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 島田療育園の歴史の紹介 ・ 通所の歴史の紹介 ・ 児童発達支援 ・ 放課後等デイサービス ・ 重症心身障がい児ショートステイの制度と問題点について 	【講義】	
テキストページ	69 ページ～		
必要物品等	パソコン、プロジェクター、スクリーン、ポインター、マイク、スピーカー		

プログラム名	相談支援機能を持った訪問看護	講師	訪問看護師
時間（分）	90分		
目的	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問看護のミッションを再確認して、ソーシャルアクションをおこして、街づくりに貢献できる訪問看護師の姿を想像できる ・医療保険における訪問看護制度の理解を深める ・個別支援（個別ニーズ）が重なり合って事業になるということが理解できる 		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・医療保険の訪問看護が理解できる ・相談支援機能とは何かが理解できて、日々の訪問看護活動に置き換えて考えることが出来る ・モニタリングをすることを看護計画に入れることが出来、実践可能になる 		
コンテンツ	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問看護のミッション・理念 ・訪問看護の報酬 ・訪問看護の役割 ・相談支援機能（ケースワーク・コミュニティーワーク・ソーシャルワーク） 	【講義】	
テキストページ	300 ページ～		
必要物品等			

プログラム名	継続支援の実際	講師	看護師
時間（分）	60分		
目的	自宅に訪問するサービスを通して、そこから通える先に連携し、子どもと家族が抱える個別的な困りごとを地域課題になるように地域化していく様子を感じることが出来る		
到達目標	今自分が受け持っている子ども達が、この先どのようになるのだろうと、興味を持ち、先の見通しを立てたいと感じて、明日の仕事で実践できそうだと感じる事が出来る		
コンテンツ	<ul style="list-style-type: none"> ・気管切開をしている子どもを通して、産まれてから就学までの流れを解説 ・他に具体的な事例があれば身近な事例で解説する 	【講義】	
テキストページ	300 ページ～		
必要物品等			

プログラム名	子どもたちのケア	講師	看護師
時間（分）	120分		
目的	健康な子どもについてや、重い障がいについてなどを学んだあとの研修であるので、そのような子ども達の基本的な感覚（どう感じているか、どう認知しているか）などを理解して、訪問看護行為そのものに活かすことが出来るようになる		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・目の前にいる子どもの喜怒哀楽を分かることが出来る又はわかろうとするようになる ・感覚統合や快刺激を入れることで、健康に導けるということが理解できて、看護行為のエビデンスとなり自信が持てるようになる 		
コンテンツ	<ul style="list-style-type: none"> ・基本となる感覚の説明 ・パニック ・過敏と鈍麻の説明 ・60分90分の訪問看護の内容を具体的に考える ・赤ちゃんケアのまとめ 	【講義】	
テキストページ	315 ページ～		
必要物品等	赤ちゃんの人形 バスタオル		

リハビリテーション部会報告

多職種合同セミナーの実施について

研究代表者 前田浩利
分担研究者 緒方健一
研究協力者 平井孝明、中川尚子

研究要旨

平成 23 年度に療法士向けの研修プログラムを作成、24 年度は 2 回の療法士対象の研修を実施し、25 年度はそれを踏まえ、多職種合同セミナーの計画立案、研修の実施に参加した。昨年度の反省からプログラム内容を変更しているが、今回は療法士のみが対象でなく、多職種が対象という事、全体プログラムの中に含まれたリハビリ的な内容についての有用性についてもアンケートを振り返る。

A. 研究目的

当研究の目的は、医療依存度の高い小児および若年の重度心身障害者の在宅医療におけるリハビリセラピストの標準的支援技術の確立とその育成プログラムの作成であり、研修内容の立案、実施を2年間にわたって行い、一定の成果を得てきている。これまでは、療法士のみが対象のプログラムであったが、育成プログラムの内容は職種ごとに重なり合っている領域があり、現場では多職種が連携していく必要性が高い。今年度は、多職種が一堂に会し、共通プログラムと各職種の専門性を活かした分科会プログラムとを用意し、研修を行った。各職種の専門性に特化している部分と、患者の疾患を理解し、見通しを持ち、地域に根差した生活を支援するのに必要な連携のための会議、計画立案、制度の理解といった幅広い内容になって

いる。今回の研修内容とアンケートから、多職種の中でのリハビリセラピストの役割と、リハビリセラピストが多職種連携に必要な知識や支援技術をどうとらえているのかを振り返り、報告する。

B. 研究方法

平成 25 年 11 月に行なった多職種合同セミナーのアンケート結果からわかることを振り返った。

C. 結果

1) 事前事後アンケートより

研修で理解してほしい項目を 10 項目ピックアップし、アンケートでその項目の理解度とどのくらい実施できているかという認識を研修前後に聞き、その変化を比較した。抽出した 10 の項目は以下の通りである

1. 対象となる子供たちの状態や病態につい

て

2. 家庭におけるケアの具体的な方法について
3. 家族ケアについて
4. 医療制度の活用について
5. 福祉制度の活用について
6. 多職種の役割と連携について
7. End-of-life care (緩和ケア) について
8. 隊員調整会議について
9. ケア担当者会議について
10. ケアプランについて

リハビリセラピストの事前事後アンケートの回答の結果は以下の通りである。

事前アンケートで、理解度が低いという認識がある（「理解していない」「全く理解していない」の回答数が「理解している」「良く理解している」の回答数を上回る）項目は 4. 医療制度の活用について、7. End-of-life care (緩和ケア) について、8. 退院調整会議についてであった。

実施しているかどうかについては、実施があまりできていないと認識されている（実施できていると「感じない」「全く感じない」の回答数が「感じる」「とても感じる」の回答数を上回る）項目は 2. 家庭におけるケアの具体的な方法について 3. 家族ケアについて 4. 医療制度の活用について 5. 福祉制度の活用について であった

事後アンケートで、理解度の認識が上がった項目は 3. 家族ケアについて 4. 医療制度の活用について であった。

実施できているという認識が上がった項目は 2. 家庭におけるケアの具体的な方法について であった。

反対に実施できているという認識が下がった項目は 8. 退院調整会議について 9. ケア担当者会議について 10. ケアプランについて であった。事前事後アンケートの結果を回答者全体で見て、実施できているという認識が下がっている傾向があるものは 8. 退院調整会議について 9. ケア担当者会議について 10. ケアプランについて であった。

2) 各部会ごとのプログラムへのリハビリセラピストの参加について

この研修は、共通プログラムと各部会に別れてのプログラムの2つで構成されている。各部会でのプログラムでは、職種に関わらず、どのプログラムに参加するかは参加者の希望にまかされている。リハビリセラピストがどの研修に参加したかをアンケートの回答数を得て、リハビリセラピストの興味関心の傾向について振り返る。

全体を通じて、リハビリ部会の研修への参加者数が最も多く延べ62名、ヘルパー部会への参加が延べ1名、看護部会への参加が延べ2名、医師部会への参加が延べ16名であった。医師部会のプログラムで参加数が多かったのは、急変時の対応で7名、その次がNICU医療の現状で4名であった。

3) リハビリ部会の研修への参加者について

リハビリ部会では5つの研修プログラムを

実施した。そのプログラムへの他職種の参加者数を見ることで、他職種がどういったことをリハビリ職種に期待しているのかについて振り返る。

全てのプログラムで20人から32人の参加と多くの人数の参加があった。参加人数が多かった順は、「重症児の認知、遊び、コミュニケーション」「呼吸リハビリテーション実技」「呼吸リハビリテーション講義」「重症児における健康を維持するための身体の仕組みと運動」「姿勢保持を助ける道具」であった。このうち、「呼吸リハビリテーション講義」は全体を通しての講義でよかったものの上位にも上がっている。

D. まとめ

医療的依存度が高く、ケアについても多くの手が必要となり、これから成長・発達し社会への関わりについても成長過程にある重症児への援助については多面的な関わりが必要となる。リハビリセラピストは幼少時から個別的に時間・頻度も多く家族、当事者と関わり、そのニーズや困りごとについての家族の思いを聴取しやすい存在である。家族からも発達について援助をしてくれる存在という期待もある。

この研修で学んでほしい10の項目から見てゆくと、「家庭におけるケアの具体的な方法」については研修に参加することで実施できているという認識が高まっていた。これは、リハビリの実施内容については、ある一定のレベルで行えているという評価の現れと解釈できる。その一方で、こどもたちが地域で生活してゆく

上で必要な「ケアプランについて」「担当者会議について」「退院調整会議について」は研修に参加し、知識を得ることで、実施できていないという認識が高まっている。その認識を持ちながら、参加していた研修の内容を見ると、リハビリ技術の習得、医療に関することに偏っている傾向が見られる。発達する時期に関わるだけでなく、機能が後退し、緩和的な関わりという視点でのリハビリも今後必要になってくる。

この3年間、行ってきた研修から分かってきたリハビリ職種の課題は、こどもたちやご家族の困りごとに対して、リハビリ専門職の技術として対応しつつ、他の専門職種の持っている援助技術とどう結びつけていくかにあると推察される。こども達のライフスパンを通しての必要な援助について計画し、制度の利用は制度をよく知っている人に相談し、それが有効に活かされているか担当者会議を通して、他の職種と一緒に評価を繰り返していく。自分たちの持っているリハビリ専門職としてのスキルを他の職種に伝える技術の向上と専門職としてのスキルの向上を行って行く必要があると考える。

リハビリ部会研修シラバス

【研修名】 地域で小児リハビリテーションに関わる療法士への研修会

【対象】

小児のリハビリテーションを専門的に行っている施設・病院でないところで、小児のリハビリテーションニア関わっている理学療法士 作業療法士 言語聴覚士

地域の療育施設などで、濃厚な医療的ケアが必要な重症心身障害児と少人数、関わっている理学療法士 作業療法士 言語聴覚士

【研修の目的（何のために）】

上記のような環境で、業務を行っている療法士が、重症児のリハビリテーションについての知識、手技、考え方を深め、地域でも多くの療法士がこどもに関わることができるようになっていく。

【到達目標（どこまで）】

- 1、超重症児のお子さんの生活について、関わっている人についてイメージ、理解することができる。
- 2、安全にリハビリを行うことができる
- 3、こども・家族とのコミュニケーションについての理解ができる
- 4、呼吸障害の仕組みについて理解できる
- 5、呼吸リハビリテーションの実施方法について理解できる
- 6、補装具の作成方法について理解できる

【プログラム構成】

No	プログラム名	目安時間 (分)	概要	形式
1	重症児とは 初めての訪問、評価について	45分	重症児とは そのライフスパン 関わっている職種 生活の困難さの理解	講義
2	重症児における健康を維持するための身体の仕組みと運動	120分	健康を維持するための身体の仕組みを以下の視点から学ぶ。骨の発達、循環、消化吸収、代謝について。運動と体の仕組みの関係についても学ぶ。	講義
3	在宅重症児、その家族とのコミュニケーション、遊びを考える	60分	なぜコミュニケーションが重要なのか 反応が微弱なこどもとどうコミュニケーションするか 家族とのコミュニケーション こどもの遊びについて	講義

4	在宅呼吸リハビリテーションについて	120分	神経筋疾患に対して、在宅で行えるリハビリテーションとその考え方について	実技
5	呼吸リハビリテーション実技について 1	30分	咳介助、アンビュバッグ、カフアシストなど器具を用いた呼吸リハビリテーションについて	実技
6	呼吸リハビリテーション技術について 2	30分	こどもに適した形での胸郭の可動性の促通	講義
7	補装具について	45分	在宅での補装具の利用の必要性と制度	講義

プログラム名	重症児における健康を維持するための 身体の仕組みと運動 ー理学療法 の視点から	講師	理学療法士
時間（分）	120分		
目的	<ul style="list-style-type: none"> ・健康を維持するための身体の仕組みを以下の視点から学ぶ。 ・骨の発達、循環、消化吸収、代謝について。 ・運動と体の仕組みの関係についても学ぶ。 		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・健康を維持する体の仕組みについて理解する。 ・運動と体の仕組みの関係について理解する。 ・これらの知識を、こどもさんの見方・評価に生かし、具体的アイデアを提示する一助とする。姿勢・運動発達とつなげて考えられるようにする。 		
コンテンツ	<ul style="list-style-type: none"> ・こどもたちが持つ体の障害に何があるか ・発達の理解 ・歩行・直立位と骨と脳の発達の関係 ・循環と呼吸の関係 ・消化吸収と免疫の関係 ・腹臥位の働きについて 	【講義】	
テキスト ページ	108 ページ～		
必要物品等			

プログラム名	在宅重症児、その家族とのコミュニケーション、遊びを考える	講師	作業療法士
時間（分）	60分		
目的	最重度と呼ばれる子どもたちが、どのようなことを感じ、何を願って生きているのかを理解することは難しい。彼らのためにどのような働きかけを行うべきかという確固たる指針も得られにくい。このような状況の中で対象児の潜在能力を見つけ、それを伸ばし、対象児の実生活と発達に貢献していくのが療法士の仕事である。そしてそのために、対象児と家族とのコミュニケーションはとても重要である。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事例を通して学ぶポイントを理解する。 ・ 重症児の行動様式を理解する ・ こどもの遊びについてと、重症児の遊びの傾向について理解する ・ 重症児とのコミュニケーションの場で、療法士が持つべき視点について 		
コンテンツ	<ul style="list-style-type: none"> ・ コミュニケーションの重要性について ・ 反応が微弱なこどもとのコミュニケーション ・ 家族とのコミュニケーション ・ こどもの遊びについて 	【講義】	
テキストページ	260 ページ～		
必要物品等			

プログラム名	在宅呼吸リハビリテーションについて	講師	医師 作業療法士
時間 (分)	120 分		
目的	超重症児の緊急入院や死亡原因の多くは、呼吸器感染症である。超重症児が安全に在宅生活を継続するには、肺炎や無気肺予防、肺の発達を助ける呼吸リハビリが重要となる。神経筋疾患に対しての呼吸リハビリテーションでは、効果的な方法は確立しているが我が国では、ほとんど実施されていないのが現状である。呼吸リハビリにより緊急入院の回数が減るという報告もあり、重症児の健康の維持のためには非常に重要なリハビリテーション手技である。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・呼吸不全について理解する ・人工呼吸管理の 4 つの目的について理解する ・子どもの呼吸器系について理解する ・呼吸リハビリテーションの目的について理解する。 ・痰とその動き方、特性について理解する。 ・呼吸リハビリテーションで使用する機器について理解する。 		
コンテンツ	<ul style="list-style-type: none"> ・呼吸不全について ・人工呼吸管理の目的について ・こどもの呼吸器系の構造について ・痰の特性とその動きについて ・呼吸リハビリテーションで使用する機器について 緊急蘇生バッグ カフアシスト パーカッション ベンチレーター	【講義】	
テキスト ページ			
必要物品等	緊急蘇生バッグ カフアシスト パーカッションベンチレーター		

プログラム名	呼吸リハビリテーション 実技 1	講師	医師
時間 (分)	30 分		作業療法士
目的	重症児の生命維持、快適、安楽な生活の維持に不可欠な呼吸機能を伸ばすための、リハビリテーション手技について学ぶ。1 では、機器を用いた、神経筋疾患患者に用いる手技について学ぶ。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・各機器に触れ、実際に操作し、その感覚をつかむ。 ・咳介助の方法を、実践する。 		
コンテンツ	<ul style="list-style-type: none"> ・アンビュバッグでの呼吸リハビリテーション実技 ・カフアシストでの呼吸リハビリテーション実技 ・咳介助法 	【グループでの実技練習】	
テキスト ページ			
必要物品等	マットレス アンビュバッグ カフアシスト		

プログラム名	呼吸リハビリテーション実技 2	講師	理学療法士
時間(分)	30分		
目的	重症児の生命維持、快適、安楽な生活の維持に不可欠な呼吸機能を伸ばすための、リハビリテーション手技について学ぶ。2では、全ての患者に共通にある、胸郭の可動性の低下に対してのアプローチを学ぶ。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・胸郭への触り方を学び、実施する。 ・胸郭の動き方を学び、動かす方を実施する。 ・胸郭の柔らかさ、硬さを体験する。 		
コンテンツ	<ul style="list-style-type: none"> ・胸郭の触り方 ・自分の立ち位置、手の置き方、動かす方向 ・実際に動かしてみる ・動かされることで、自分の変化を知る ・講師の行う方法と比較してみる ・複数の人の胸郭を触り、その差を認識する 	【実技練習】	
テキストページ			
必要物品等	マットレス		

プログラム名	補装具について	講師	理学療法士
時間 (分)	45 分		
目的	重症児の運動機能の障害を保管するために、様々な道具を利用する。法的に助成を受けられるもの、受けられないものがある。そういった用具のうち、身体障害者手帳により給付される補装具について学ぶことを目的とする。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・重症児の生活にとって不可欠な補装具の種類、目的を知る。 ・作製の流れ、制度を知る。 		
コンテンツ	<ul style="list-style-type: none"> ・年齢・運動機能によってどのような補装具を使用するか ・その効果はどのようなものか ・意見書について ・制度について 耐用年数、地域ごとの特性 	【講義】	
テキストページ	266 ページ		
必要物品等	実際の補装具 座位保持装置 短下肢装具 など		